

ミルトン・メイヤロフのケアリング論における「場」についての一考察——八木誠一の統合論における「場」を参考に——

鳥居雅志

はじめに

「ケア」「ケアリング」に関する先駆的研究者ミルトン・メイヤロフ (Milton Mayeroff, 1929-1979) は、その著書 *On Caring* (1971) に先立って、論文 'On Caring' (1965) を学術雑誌 *International Philosophical Quarterly* に発表している。これらは日本でも出版されており、七一年の著書は『ケアの本質——生きることの意味』と、六五年の論文は「ケアすること」と訳されている^①。

論文「ケアすること」でのメイヤロフの目的は、「あるひとつの重要な生き方を提示し、これを少しばかり理解しやすいものにした^②い」というものであった。高橋隆雄も指摘しているように、ここで考察されているのは、人間の本質や存在論的次元に関わるケアではなく、主に存在的次元にあるケアの活動の本

質をなすパターンであり、そのことによってメイヤロフは人間以外も含む広義の他者の成長の援助としてのケアの現象学的記述を行っていたと言えよう^③。

メイヤロフは論文「ケアすること」の最初の項目「ケアの現象学」において、自分が関心を抱いているのは、「単に三つの要素(ケアする人、ケアの間柄、ケアされる人)を加えただけのものというのではなくて、この三つの要素が一応識別できると考えられるような、より包括的な対象にある」と述べ、「ケアとは、ケアする人、ケアされる人に生じる変化とともに成長(発展をとげる関係)である^④とし、この関係において見られる要素について多くの頁を費やしている。しかし、最後の項目である「広義の意味のケア」において、これまでの項目ではケアをただある特定の生き方としてとらえて考察してきたとした上で、ある人の人生というより大きな文脈における「場」につい

て触れ、「この包括的秩序づけというものの特徴は、一般化して言えば、この世界で、場の中にある」(in place)ということである」と述べる。

そして七一年の著書『ケアの本質』において、メイヤロフはこの存在論的な問題を重要なものとして多くの頁を割いて扱っている。メイヤロフは序で次のように語っている。

この小著は、互いに関連する二つの主題をあつかっている。一つは、ケアすることを一般的に記述することであり、もう一つは、ケアすることがどのようにして全人格的な意義を持つか、その人の人生にはどのような秩序づけを行うかを説明することである。「ケアすること」と「自分の落ち着き場所にいる」という二つの概念は、人間であることについて実りある考え方を提示してくれる。そしてそれ以上で大切なことは、この概念は、私達自身の生を自分たちがもつとよく理解するのに役立つということなのである。

高橋が指摘しているように、六五年の論文「ケアすること」では、「ケア概念が人間の本質と深く関わることは明示されず、単にケアの現象の記述がなされていた」のだが、七一年の著書『ケアの本質』では、「人間本来のあり方、人の生の意味」への言及が明確になされ、「ケアの理論は意識や活動の現象の記述という次元を超えることになる」のである。

メイヤロフは「ケアすること (Caring)」と「場の中にいる ("In-Place")」とこう二つの鍵概念を用いて、われわれの生き方

がどのようにあるのか、その生で起こっていること、われわれの生がどのように意味づけられるのか、その生において重要なことは何かについて論じる。ケアの関係にあること、「場の中にいる」ことによってこそ、われわれは自己の生を生きていることができる、とメイヤロフは言うのである。

本論では、メイヤロフが取りあげた二つの鍵概念のうちの一つである「場の中にある」ということに焦点を当て、その「場」がどこにどのようなようにあるのかということ、「場所論的神学」の提唱者である八木誠一（一九三二—）の「場」を通して検討し、ケアの関係にあるわれわれの生き方について、そして「われわれの場」について考察していきたい。

一 メイヤロフのケアリング論における「場」

メイヤロフによれば、ケアするとは、ケアの対象が何であれ、「その相手が成長するのを援助する」ことである。その際、ケアする者は、そのケアする対象を自分自身の延長として相手と一体であると感じると同時に、掛け替えのない価値を持っている。独立したものと感じる。ケアにおける同一性の感覚には差異の意識が含まれており、他者と自分たちとの間の差異の意識は、両者の間の一体感を含んでいるのである。ケアにおいては、そうした「差異の中の同一性」が意識されつつ、「私たちを一緒に包んでくれている何ものかに双方が共にかかわっているという感覚もある」とメイヤロフは言う。われわれはそこにおい

て「他者へのケアをすることにより、また他者を他者たらしめるべくたすけることによ¹⁴」って存在しているものであり、また「他者の自己実現は私たちの生活の方向づけ、私たちに何が適切で何が不適切かの感覚を提示してくれる」¹⁵のである。そして「相手の自己実現をたすけることが、とりもなおさず、私たちの自己実現にもなる」¹⁶のである。メイヤロフは次のように言う。

一人の人間の生涯の中で考えた場合、ケアすることは、ケアすることを中心として彼の他の諸価値と諸活動を位置づける働きをしている。彼のケアがあらゆるものと関連するがゆえに、その位置づけが総合的な意味を持つとき、彼の生涯には基本的な安定性が生まれる。すなわち、彼は場所を得ないでいたり、自分の場所を絶え間なく求めてたださすらっているのではなく、世界の中にあつて、「自分の落ち着き場所にいる」のである。他の人々をケアすることとおして、他の人々に役立つことによつて、その人は自身の生の真の意味を生きているのである。この世界の中で私たちが心を安んじていられるという意味において、この人は心を安んじて生きているのである。それは支配したり、説明したり、評価したりしているからではなく、ケアし、かつケアされているからなのである。¹⁷

何らかの対象のケアに携わっていると、そのケアの対象を中心に周辺の活動や価値が自ずと序列化されてくる。そのケアが生活の全体を統合するほどに十分に包括的なものであれば、ケ

アする者はそのケアによって自身の生を秩序立てることを通して、この世界で「場の中にいる」ことができる。「場の中にいる」ケアする者は、ケアする対象によって必要とされている。ケアする者はケアする対象を委ねられている。そういった事実からくる帰属感によつて、ケアする者は世界に根を下ろした状態として安定する。¹⁷ そのようにして築かれた関係は、ケアが行われしていくことによつてその範囲を拡げ、他のものと結びつき、世界を織り成していく。そうした「場」は、ケアの対象である他者の要求に応答することによつて創造され、絶えず新しくなつていき、再確認される。¹⁸ そして「場の中にいる」という了解によつて、われわれは「この私がいったい何者で、何をしようとしているのかを理解」¹⁹するだけでなく、「存在の持つはかり知れない性格」、「存在の持つ神秘そのもの」、「そもそも森羅万象がここに存在しているという壮大な神秘、驚異」に気づかされる。²⁰メイヤロフによれば、「感謝」とは、そうした「場の中にいる」ということから生ずる自然な発露²¹なのである。

以上見てきたように、メイヤロフのケアリング論における「場」は、ケアする者とケアされる者とのはたらきによつて織り成されていくものであり、しかもケアする者とケアされる者との関係を生起させるはたらきであり、その「場の中にいる」ことにおいて、私は私の生の意味を十全に生きる²²ことのできる「場」である。²³

ところでメイヤロフはケアする者はケアされる人を見て、

「私と全く『同一の世界』に存在している人だと感じとって」⁽²⁴⁾と述べているのだが、それではメイヤロフのケアリング論において、ケアする者にとって『異なる世界』に存在している人だと感じる（他者）はケアの対象にはならないのだろうか。また敵対する者はどうなのであろうか。鎌野育代は、「メイヤロフのケアリングとは特定の『ケアされる者』と『ケアする者』との相互関係性といった比較的限定された場における理論であるということがいえる」と指摘している。⁽²⁵⁾確かにメイヤロフは、ケアする者が自分自身であることの根本的な明澄性を獲得するには、「私のケアと相容れない多くの不適切なものが排除され⁽²⁶⁾なければならぬ」と述べており、他にも、「自分のケアと両立できないもの、無関係な多くのものを除外すると」⁽²⁷⁾、「雑然としたものを排除していくことにより」⁽²⁸⁾、などといったようにケアの関係においては（他者）の排除を前提としているかのようなことを述べている。しかし、メイヤロフは、他者を知り尽くしてしまうということはケアとは無縁であるとも述べており、さらに、「場の中にいる」ことと混同してはならない⁽²⁹⁾こととして、「場の『外』にいる人たちと『中』にいる自分を常に比較」⁽³⁰⁾するようなことを挙げ、「私が『場の中にいる』ということは、『場の中にいる』ことから他の人たちを排除することを前提としているのではない」とも述べている。またメイヤロフは、われわれにはしばしば否定的な匂いのあるものを無視する傾向がある⁽³¹⁾ということを指摘して、そのことを批判してもいる。一体

これはどういうことなのであろうか。メイヤロフの「場」は、鎌野が指摘しているように閉じたものなのであろうか。しかしそれではメイヤロフの言葉から窺える閉じたあり方への批判はどこから来るのであろうか。

こうした疑問について考えるための足掛かりとして、次にメイヤロフと同じく他者と共に生きるわれわれの生き方において「場」を重視している、新約聖書学者・宗教哲学者・神学者である八木誠一の統合論における「場」について見ていくことにする。

二 八木誠一の統合論における「場」

八木誠一は、新約聖書の研究から入り、その後多くの宗教哲学者らとの対話などを通して「場所論的神学」を提唱するに至る。その神学の中核を担っている概念が「統合」であり、その中でわれわれの関わりのあり様——われわれは関わりの中で、「孤立した存在ではなく、コミュニケーションで定義される『交わり』」、「相互関係」のなかにあり、そのなかで成り立⁽³²⁾っている——について詳論しているのが「フロント構造」論である。

フロント構造とは、他者のフロントとの出会いがそのもの自身との出会いであり、また、「あるもののフロントが、そのもののフロントであるままで、そのものではない他のものの一部を構成している」⁽³³⁾構造、つまり互いが互いを前提として成り立っている「極」同士の関わり合いによって成り立っている構造

のことである。フロント構造においては自由（自己決定）・自己同一性と関係性（相互作用によって変わること）が両立する⁽³⁴⁾。このフロントによる極同士の連関は、二つのものの間だけの事柄に限らない。われわれの世界はフロント構造によって無限に複雑な連関によって成り立っているのである。

ところで、八木は、こうしたわれわれの世界における極同士の関係（水平方向の関係）は、円環（八木の用語で言えば「統合体」）を成すように働きかける超越のフロントを宿す（垂直方向のフロント構造）ことによって成立していると言う。こうした働きをしている「統合の場」——「こうした働きである統合の場」と言った方がより適切かもしれない——について、八木は心と音楽という類比をもって説明する。音というものは実在するものではないが、音は他の音との区別によって一つの音として認識される。そしてそうした音たちが心という統合の場に於いて互いに調和し、まとまりを成して音楽を形成していく。こうして、心が音楽を包み込み、心の場に置かれた音楽が心を表出する。心も、音楽によって形を成すのである。ここに「心と音楽」の「一が見て取れる。ただし「心と音楽」は二つが一つになったのではない。そうではなく、音楽が心の場に置かれたことによって、同時に「心と音楽」が成り立っているのである。このように、水平方向（極同士の関係）のフロント構造は、垂直方向（超越と個の関係）のフロント構造によって成り立っており、統合を成すように超越から働きかけられている。つま

り、われわれは互いに支え合っているという水平方向のフロント構造の関係の「場」に於いて有り、同時にそうしたフロント構造を成り立たせている「場」に於いて在るのである。

われわれは、われわれを超えたところの（はたらき）によって生かされている。そして八木は、その（はたらき）の最深の場では、われわれは世界内の一切の対立を超え一切が無条件に受容されていると言う⁽³⁵⁾。ありのままの現実の全てを、ありのままに認識し、ありのままに受け取り、受け容れることは、対世界的には意味と無意味との対立を超えることであり、対人的には「無条件の赦し、受容」である。われわれはそこにありつつ、そうであればこそ、われわれの世界——日常生活すなわち有と無、生と死、善と悪、価値と無価値、意味と無意味とが対立する世界——においてそのつどの行動の選択によって、統合の（いま・ここという局所的）現実化に向かうのである⁽³⁶⁾。このように相対的な「統合作用の場」は限られた空間ではあるが、しかし、その相対的な「場」は閉ざされてはいない⁽³⁷⁾。だからこそ「場」同士も互いに極と成り合うことができる。統合体は、他の統合体と向き合い、より高次の統合体が出現する。そうして新しい歴史が作られていく。この意味で、統合作用は常に新しく現在にいわば切り込んでくる作用であり、われわれが置かれている「場」とは、究極的にはどこまでも深く、そして開かれている「場」に於いてあるのである⁽³⁸⁾。

三 メイヤロフのケアリング論における

「場」の再考

八木の統合論における「場」は重層的な「場」であり、開かれた「場」であった。そしてその深奥は、善と悪や意味と無意味や価値と無価値といった対立を超え、全てが許容される無限の「場」であり、たとえわれわれがどこに立っているように、はたらきかけ、支えてくれる「場」であった。それゆえ、善と悪、価値と無価値、意味と無意味とが対立する世界においても、たとえ敵対する相手が現れても、そうした面が全てであるわけではないゆえに受容し、新たな統合体を形成するように働きかけられる「場」であった。

それでは、メイヤロフのケアリング論における「場」は、どうであらうか。

メイヤロフのケアリング論は日常生活に座を置いており、そこで語られる「場」も、その日常生活におけるケアする者とケアされる者との関係によって織り成されていることは確かであるように思われる。しかし、そうだからといって、われわれがそこに閉ざされているというわけではないのではないだろうか。メイヤロフは、われわれはケアにおいて、「存在のはかり知れない性格」、「存在の持つ神秘そのもの」、「そもそも森羅万象がここに存在しているという壮大な神秘、驚異」に触れうるという⁽³⁹⁾。そして、そうしたことに触れて気づくこととして次の

ように語っている。

私たちの能力や限界がどの程度のものであれ、また、所有しているものが何であれ、所有していないものが何であれ、私たちは皆ごとく運命を共にしているのだという事実を、それは私たちによりはっきり認識させてくれる⁽⁴⁰⁾。

ケアにおいて気づかされる事実は、われわれはこうした無条件に皆を支える「場」において在り、だからこそケアの関係も成立しうるということの意味しているのではないだろうか。そしてメイヤロフの言う、われわれの「感謝」⁽⁴¹⁾とは、そうした「場」に由来しているのではないだろうか。後藤恭子は、次のように語っている。

他者との結びつき、依存関係、自己を発見することのできる居場所、それらは当然自分から要求して与えられるべきものではなく、ただ恵みとして与えられていることを認める。喜びと感謝をもって。そして自分が恵みを受けているという「感謝 (Gratitude)」の念から関係ある人へのケアへと向かうのである。

メイヤロフがケアリングの考察を終えるときには、全く宗教的な境地に私たちを導いていく。感謝の対象は広い意味で「存在するすべてのものの源泉」「存在全体 (Nature)」である⁽⁴²⁾。

メイヤロフは、そのケアリング論の座を、あくまでも日常生活に置いていられると思われる。しかし、そこで語られるケアの

「場」は、宗教的な次元と触れうる境界線上、日常と宗教との間を「場」としていると言うことができるのではないだろうか。そのケアは、無限の開け／無条件の赦しという「場」に支えられている。だからこそ、そもそもケアの関係は織り成されていくるのであるうし、そのケアは全てに開かれていくだろう。メイヤロフは、そのケアリング論において、そのような全てに開かれていくケアを示し、そのことによって、われわれの可能性をも示してくれているのではないだろうか。

おわりに

本論では、メイヤロフのケアリング論における「場」を、「場所論的神学」を提唱している八木の統合論における「場」を足掛かりとして検討することによって、ケアとは宗教的な次元に触れうるのではないかという可能性を見てとることができたように思われる。また、ケアが全てに開かれるという可能性も見てとれたように思われる。

メイヤロフは日常のケアに視点を置きながらも、そのケアは宗教的な次元と触れうる境界線上、日常と宗教的な次元との間を「場」としていた。それは、われわれの日常の関わりの「場」が無限の開け／無条件の赦しに支えられつつ、日常と宗教的な次元との「間」にあるということの意味しているであろう。

主要参考文献

- 鎌野育代「家庭科における『ケアリング』の教育実践の検討」『千葉大学教育学部研究紀要』六一巻、二〇一三年、二二七―二三三頁。
- 後藤恭子「教育におけるケアリング再考——メイヤロフのケアリング論を中心に——」日本カトリック教育学会「カトリック教育研究」二六号、二〇〇九年、三九―五二頁。
- 品川哲彦「正義と境を接するもの——責任という原理とケアの倫理」ナカニシヤ出版、二〇〇七年。
- 高橋隆雄「メイヤロフ・ケア論への道」熊本大学倫理学研究室『先端倫理研究』七巻、二〇一三年、一一―二六頁。
- 中野啓明「メイヤロフとハルトのケアリング論」中野啓明・伊藤博美・立山善康編『ケアリングの現在——倫理・教育・看護・福祉の境界を越えて——』晃洋書房、二〇〇六年、六七―七八頁。
- 八木誠一「フロント構造の哲学——仏教とキリスト教の相互理解のために——」法蔵館、一九八八年。
- 八木誠一「コミュニケーションとしての看護者——介護の豊かさについて」増田樹郎・山本誠編『解く 介護の思想——なぜ人は介護するのか——』久美、二〇〇四年、一一―三頁。
- 八木誠一「へはたらく神」の神学』岩波書店、二〇一二年。
- 八木誠一「回心——イエスが見つけた泉へ」ぶねうま舎、二〇一六年。
- Milton Mayeroff, "On Caring", *International Philosophical Quarterly*, vol.5, Issue3, September 1965, pp.462-474. (田村真・向野宣之訳「付録Ⅰ ケアすること」) ケアの本質——生きることの意味』ゆみる出版、一九八七年、一八三―二一五頁。)
- Milton Mayeroff, *On Caring*, Harper & Row, 1990 (1977). (田村真・向野宣之訳「ケアの本質——生きることの意味」ゆみる出版、一九八七年。)

(1) 論文「ケアすること」は、著書『ケアの本質』の付録Ⅰとして訳出されている。なお、本論文での引用は基本的には翻訳されたものを用い、参考・引用の表記は原著の発行年と頁を括弧内に記すこと

- とする（一九七一年に初版が出版された *On Caring* に関しては、用いた版である一九九〇年のものを記す）。
- (2) ミルトン・メイヤロフ「付録Ⅰ ケアすること」『ケアの本質——生きるこの意味』（田村真・向野宣之訳）ゆみる出版、一九八七年、一八三頁（1965, p.462）。
- (3) 高橋隆雄「メイヤロフ：ケア論への道」熊本大学倫理学研究室『先端倫理研究』七巻、二〇一三年、一一五—一六頁。
- (4) メイヤロフ、前掲論文、一八五頁（1965, p.463）。傍点引用者。
- (5) 同論文、二一一—二二三頁（*ibid.*, p.473）。
- (6) 同論文、二二三頁（*ibid.*）。
- (7) 全体の約四割に及ぶ。また品川哲彦は、メイヤロフのケアリング論は、「ケアの哲学的ないし人間存在論的分析」であるとまで言っている（品川哲彦『正義と境を接するもの——責任という原理とケアの倫理』ナカニシヤ出版、二〇〇七年、一五四頁）。
- (8) ミルトン・メイヤロフ『ケアの本質——生きるこの意味』ゆみる出版、一九八七年、一六頁（1990, p.3）。
- (9) 高橋、前掲論文、一一八頁。
- (10) メイヤロフ、前掲書、一五頁（1990, p.2）。
- (11) 同書、一八—二〇頁（*ibid.*, pp.7-8）。
- (12) メイヤロフ、前掲論文、一八七頁（1965, p.464）。
- (13) 同論文、一八七頁（*ibid.*, p.464）。
- (14) メイヤロフ、前掲論文、一九七頁（1965, p.467）。傍点著者、原文は斜体。
- (15) 同（*ibid.*）。
- (16) メイヤロフ、前掲書、一五一—一六頁（1990, pp.2-3）。
- (17) 同書、一四三—一四四頁（*ibid.*, p.85）。
- (18) 同書、一五一—一七頁（*ibid.*, pp.68-69）。
- (19) 同書、一五六頁（*ibid.*, p.92）。傍点著者、原文は斜体。
- (20) 同書、一五七—一五八頁（*ibid.*, p.93）。
- (21) メイヤロフ、前掲論文、二二三頁（1965, p.473）。メイヤロフ、

- 前掲書、一七六頁（1990, p.102）。
- (22) メイヤロフ、前掲書、一三三頁（1990, p.76）。
- (23) 中野啓明「メイヤロフとハルトのケアリング論」中野啓明・伊藤博美・立山善康編『ケアリングの現在——倫理・教育・看護・福祉の境界を越えて』晃洋書房、二〇〇六年、七二頁。
- (24) メイヤロフ、前掲書、九五頁（1990, p.54）。
- (25) 鎌野育代「家庭科における『ケアリング』の教育実践の検討」『千葉大学教育学部研究紀要』六一巻、二二八頁。
- (26) メイヤロフ、前掲書、一四五頁（1990, p.86）。
- (27) 同書、一五九—一六〇頁（*ibid.*, p.94）。
- (28) 同書、一六〇頁（*ibid.*）。
- (29) 同書、五六頁（*ibid.*, p.30）。
- (30) 同書、一一九頁（*ibid.*, p.70）。
- (31) 同書、一四二頁（*ibid.*, p.84）。
- (32) 八木誠一「コミュニケーションとしての看護者——介護の豊かさについて」増田樹郎・山本誠編『解く 介護の思想——なぜ人は介護するのか——』久美、二〇〇四年、一〇頁。
- (33) 八木誠一「フロント構造の哲学」法蔵館、一九八八年、一六頁。傍点著者。
- (34) 八木誠一「回心——イエスが見つけた泉へ」ぶねうま舎、二〇一六年、五七頁。
- (35) 同書、一九三頁。
- (36) 同書、一九六頁。
- (37) 同書、九八頁。
- (38) 八木誠一『へはたらく神』の神学』岩波書店、二〇一二年、一一八頁。
- (39) メイヤロフ、前掲書、一五七—一五八頁（1990, p.93）。
- (40) 同書、一五八—一五九頁（*ibid.*）。
- (41) メイヤロフ、前掲論文、二二三頁（1965, p.473）。メイヤロフ、前掲書、一七六頁（1990, p.102）。

(42) 後藤恭子「教育におけるケアリング再考——メイヤロフのケアリング論を中心に——」日本カトリック教育学会『カトリック教育研究』二六号、二〇〇九年、四五頁。

(とりのい・まさし、倫理学・キリスト教人間学、
立教大学兼任講師)